国士大ディフェンスの執拗なマークに自らのリズムをつかめなかった赤嶺。周りのフォローもなく孤立してしまう場面が多々見られた（撮影・川崎篤彦）

駒澤大学０－２の国士舘大学

赤嶺、原を封じられ、攻撃が単調に…
駒大サッカーのらしさが出せず

狙われた2トップ

原一樹2、赤嶺真吾0、この数字は駒大2トップを任された2人の最終的なシュート数である。この数字が何を表すかは言うまでもないであろう。とにかく駒大サッカーができなかった。

今節の国士大戦はこの言葉しかない。国士大ディフェンスは明らかに駒大攻撃陣を研究した守備体制であった。駒大はディフェンスラインからのロングフィードのボールを赤嶺が落とし原に繋げて攻撃を展開していく形をとっていたのだが、その攻撃展開の最初のステップである赤嶺に必要すぎるチェックを国士大ディフェンスがいれる。2トップの展開を徹底的にやられたのがあまりにも痛すぎた。「（国士大の）守備の意識が強すぎたので攻撃ができなかった」（赤嶺）「相手もバカじゃないから研究してきて赤嶺にヘッドの強い選手をぶつけてきて、セカンドなどの対処もとっていた」（牧野）らのコメントからも国士大の徹底したディフェンス体制が裏付けられていた。

しかし、今節の引き分けの要因は攻撃陣への必要なチェックだけではなかった。さきほどの牧野のコメントにも出ていたセカンドボールへの対処の仕方が問題でなった。特に赤嶺が潰された後のセカンドボールがほぼ国士大ボールになり、そこから国士大の攻撃に移行し危ない場面を迎える。この形が試合の雰囲気を国士大ペースにさせていた。シュート数では駒大5本・国士大7本とさほど変わらないのにもかかわらず、誰もが国士大ペースに。もう1つ阿部は攻撃が繋がらなかったことについて「ロングフィードとかサイドからのセンタリング、シュート精度、得点に絡むことを全部の精度をあげなくてはならないと思う」と得点での過程段階の甘さを指摘している。自分の仕事であるロングフィードの不正確さを反省するとともに、ＦＷ陣への得点力を要求している。次のリーグ戦までは3週間時間が空く。この3週間で何を強化するかによって今後のリーグ戦の戦い方も変わってくるはずだ。

（永田　博義）